



愛媛県教育研究協議会文化部編

「よい」教育を求めて

教育研究局長 亀田 勝豊

全ての教職員は、常に「よい」教育を求めて日々の実践研究に取り組んでいると思います。では、私たちが考えている「よい」教育とは、どのような教育を意味するのでしょうか。

教育は「国家や社会を繁栄させるためだ」とか、「子どもの個性を伸ばすためだ」とか、その目的を「よい」の基準にすることがあります。また、「学問や教科の系統性を尊重することが大切だ」とか、「子どもの経験を尊重することが大切だ」とか、その指導内容及び方法を基準にすることもあります。その他にも「よい」の基準はさまざまなレベルがあると思います。

戦後教育史を振り返ってみますと、これらの基準についてともすると二項対立的に議論されることが多かったのではないのでしょうか。つい最近の教育改革の流れを見ても学力低下論争をきっかけにして「ゆとり」か「詰め込み」かという議論が起りかけました。このような議論の様相はというと、それぞれの立場の方が、自分の直接的な教育体験に基づいた強い信念を、互いに押し付け合うような仕

方で論じられることが多かったように思います。かく言う私も、過去にはこれこそが「よい」教育であると断じ、自分の信念を絶対化して相手に議論を挑んでいたなあ、反省することしきりです。しかし、最近私の周りを見回してみますと、これとは反対に、教育には絶対的に「よい」とか「正しい」とかという普遍的なものはないと、全てを相対化してしまい、一種のニヒリズムになっているのではと感じてしまうこともあります。このような悪しき絶対化や相対化に陥らないで、だれしもが「よい」教育だと深く確信し、お互いに共通理解できるような議論の仕方はないものでしょうか。近頃、私はその答えを求めて、思考の袋小路に迷い込んでいました。

そのような折に、ふと立ち寄った書店で何と私の問題意識にぴったりの『どのような教育が「よい」教育か』という本に偶然、出会ったのです。私は飛びつくように買い求めました。そして、書名とは裏腹な、とても難解な内容にもめげず、一気に読み通し、微かな光明を見出すことができました。

筆者の苦野一徳氏は、教育の本質や正当性は、自分がこれは「よい」教育だと確信することがあれば、その確信の成立条件と構造を他者と問い合った時、一定の共通

了解を見出すことができるのではないかと言っています。また、このような教育の論じ方は、現象学の方法であるとも言っています。さらに、苦野氏自身の「よい」教育についての確信内容も述べていますが、ここでは紙面の都合で解説を省略します。関心をもたれた先生は、ぜひ本書を手にとってみてください。多くの示唆を与えてくれると思います。

さて、愛教研も創立して半世紀を経て、今までの組織の在り方を検討・改善して、新たな歩みを始めました。その改善策の一つとして、この文化日より「ひびき」の内容を、来年度より機関紙「愛媛の教育」の内容に集約・統合していくことになっています。したがって、今回の第三十号が、文化日よりとしての「ひびき」最終号になります。今後は、この三十年間「ひびき」が果たしてきた役割を、新装「愛媛の教育」へ引き継ぎます。その際に、会員自身もこれは「よい」教育だと確信している教育実践研究の公表とその議論の場を保障したいと考えています。そして、会員だれしもが「よい」教育だと共通理解することができ、愛媛の教育を共に創造し、愛教研の教育研究活動を活性化していきたいと願っています。

教育実践上の今日的課題

—言語活動の充実に向けて—

今治市立日高小学校 進藤 亮輔

一 はじめに

今年度から学習指導要領が小学校においては全面実施となった。この学習指導要領は、中央教育審議会答申（平成二十年一月）を踏まえて改訂されたもので、その答申の中で、「7. 教育内容に関する主な改善事項」の第一項目に「言語活動の充実」が挙げられている。そして、「各教科等における言語活動の充実」は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である。」と書かれている。私たちはこのことを重く受け止め、「言語活動の充実」に向けて取り組まなければならない。

二 本校の実態

本校は、教育目標を「よく考え、仲よく励む、たくましい子の育成」、研究主題を「ともに学び合い、主体的に生きる児童の育成」とし、国語科を中心に研究を推進している。そして、具現策の一つとして「気付き、考え、実行する活動の場づくりを工夫し、言語活動の充実を図る実践研究」を進めている。

言語活動の充実には国語科に限ったものではなく、各教科等の特性・役割を生かしながら相互関連を図り、学校全体で取り組まなければならないものである。しかし、まずは国語科の言語活動の充実を図ることが大切である。指導書に例示されている三十六の言語活動例を基に、今年度は、校内研究授業において次のような実践を行った。

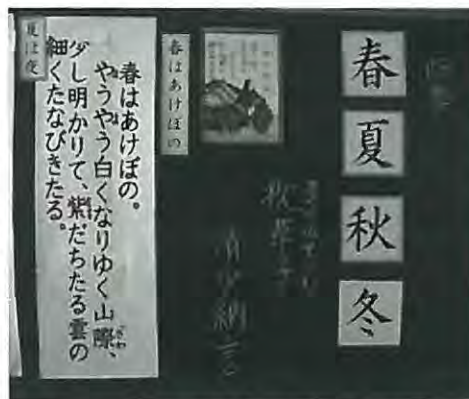
三 具体的な実践例

(一) 授業研究

ア 六年 児童が「古典の学習は楽しい」と感じる日本古典の導入の工夫

本格的な古典は今年度から入ってきた教材で、「古典の指導については、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する。」と改善の基本方針に書かれている。児童にとっては昔の言語と今の言語の違いを感じることによって言語環境を考えていくことができる。学習では、ワークシートを効果的に活用し、歴史

的仮名遣いの読み方を書かせたり、教材文を拡大提示したりすることにより、古文に親しみをもち、理解を深めることができた。また、単元を通して、他の古典作品の音読（話すこと）を計画し、さらなる興味・関心をもたせる工夫もした。



授業の導入で活用した板書の一部

イ 三年 言葉のリズムを感じたり、情景をイメージしたりしながら、俳句に親しむための指導の工夫

三年生にとっては、初めて文語調に触れる段階である。季語や五七五のリズムや響きに親しみをもち、身近なことをテーマに俳句を作らせた。授業では、児童全員が作った俳句の中から「よくできている」と感じた俳句を各自が選び、その選んだ理



選ばれた俳句の作者の発表

由を話し合い、俳句のよさについて深く合うことができた。また、作者も作ったときの気持ちを発表し、お互いの理解にもつながった。三年生という段階で俳句の入門が達成でき、児童は次の短歌への学習意欲を高めることができた。

ウ 一年 動物の生活の特徴や様子について説明した文章を読み、自分の思いや考えをもつための指導の工夫

調べた動物についてグループでまとめたことを発表し、その後、動物と人間とのかかわり方について話し合う。発表の時は、説明文の構成の理解を助けるために「説明」「問い」「答え」と色分けした用紙を活用し、電子黒板で動物の痕跡や様子を提示して視覚的に理解させた。また、ワークシートに動物シールを貼ることに伴って説明文の理解を深めた。その後の話し合いでは、自分の考えや感想をもたせるた

めに、発表の仕方を記述したワークシートを活用した。なお、話にくい児童もいるので、まずは、ペアから話し合いを始め、全体に広げる等の工夫をした。また、本文中に出てくる動物たちの図鑑や松ぼっくりなどの実物を教室に置き、本文の理解と読書活動への意欲付けも図った。



教室に設置した学習コーナー

(二)

評価の研究
授業は、目標を達成するために、適切な内容を準備し、効果的な指導方法を工夫して実施される。そして、その授業を通して、目標が達成されたかどうかを評価することになる。言語活動の充実はその目標を達成するための効果的な手段・方法であると考える。そこで、「授業

評価システムガイドライン(愛媛県教育委員会編 平成十九年)を参考に、「授業評価カード」を作成し、授業参観・研究協議の時に活用している。

評価項目として、「授業のテーマに迫った授業である」「言語活動は、児童の発達段階に即したものである」等を設け、授業が児童の思考力・判断力・表現力を身に付けるために適切であったかどうかを中心に評価し協議している。また、これら以外にも、教員の資質の向上を目指した項目を設定している。

言語活動における評価については、まだ研究中である。授業実践を通して、児童一人一人の見取りを大切に、ねらいと指導と評価の一体化を図っていかなければならない。

授業評価シート	国語科	目次	評価者	評価
1	授業の目的・目標が明確である。	4	3	2
2	授業の準備が十分である。	4	3	2
3	授業の展開がスムーズである。	4	3	2
4	授業の進捗が適切である。	4	3	2
5	授業の効果が期待できる。	4	3	2
6	授業の振り返りが適切である。	4	3	2
7	授業のまとめが適切である。	4	3	2
8	授業の態度が適切である。	4	3	2
9	授業の安全が適切である。	4	3	2
10	授業の環境が適切である。	4	3	2

授業評価カード



読み聞かせの様子

(三)

書く活動の推進(掲示板) 全国学力・学習状況調査等の結果、本校児童は「書く活動」が他の領域に比べて十分でないことが分かった。そこで、学校行事や各学年で行う活動の後、プリントを用意し、自分の気持ちや相手に伝える文章を書かせることにした。そして、教室や児童用玄関に掲示板を設置し、他学年の掲示物も見られる機会を設けた。児童は興味をもって友達や他学年の文章を読み、書く活動に対してよい動機付けや習慣付けとなつていく。

(四)

読み聞かせ 本校には、学習ボランティアとして「朝の読書の時間」に保護者や地域の方が「読み聞かせ」に来てくださっている。読書活動の充実はもとより、人間形成

の情緒を養う要素ともなっている。

四 成果と課題

(一) 研究授業で、各学年に応じた言語活動の充実を図るための手立てに取り組み、事例研究を進めることができた。

(二) 言語活動の充実には、全教科等を通じて図られなければならないものである。しかし、現時点ではほぼ国語科に限られている。他の教科での実践等も研修計画に位置付けたい。

(三) 各教科等でどのような思考力・判断力・表現力を身に付けなければならないのか、各教科等の目標や内容を確実に把握し、身に付けさせたい力にふさわしい言語活動を位置付けた全体計画や指導計画の作成を進めたい。

五 おわりに

「言語活動の充実」に向けて、研究を始めたばかりで、手探りの状態である。今後も、授業研究や職員研修で「本校の課題は何か」「児童に身に付けさせたい力は何か」「教員としてより向上させなければならぬ資質は何か」を考え、全教職員が一丸となって取り組んでいきたいと思う。

地域産業の教材化 日本一の生産量を誇る 松前の小魚海産珍味

松前町立松前小学校
二宮 和広

松前町は、道後平野の西南部に位置し、人口は三万一千人である。伊予の三義民の一人、義農作兵衛の生誕地として知られている。

町の大部分が海拔二〇メートル以下の平野であり、中・東部の田園地帯では、肥沃な土地と重信川の豊かな地下水等を生かして米、はだか麦等の穀物や近郊農業としての野菜の生産が盛んである。かつて沿岸漁業で栄えた伊予灘沿岸には、世界でトップクラスのシェアを誇る炭素繊維工場、日本一の小魚珍味生産量を誇る海産珍味工場群がある。また、最近大型商業施設もでき、地域産業は時代の変化に応じた発展を遂げている。



松前港にある珍味発祥の地の記念碑

これらの地域産業の特色を生かして、生活科、社会科、総合的な学習の時間等で教材の開発・活用に努めている。その中から第三学年社会科「松前の珍味工場」の実践について紹介したい。

松前町の珍味生産は、約一〇〇年前、地元の浜田佐太郎が、小魚に味をつけて乾燥させた「儀助煮(ぎすけに)」を作ったことに始まる。やがて、珍味は、松前の「おたた」によって盛んに売られ各地に広まっていった。その後各工場が製品の開発や販路拡大に努め、小魚珍味の生産は全国の約七〇%のシェアを占めている。

本校区には、町の重要な生産活動の一つである珍味工場が数多く分布しており、第三学年社会科学習の中心である工場の見学・調査を通して次のことをねらいとして授業実践を行っている。

○ 松前町には、地域の特色を生かして様々な生産に関する仕事があり、それらは自分たちの生活を支えていること。

○ 珍味工場では、原材料の入手、加工、販売、製品開発等様々な仕事で工夫をしていること。

○ 原材料の仕入、製品の販売、働く人の通勤圏等において地域と結び付いていること。児童は、販売されている珍味の袋調べ、松前で作られている珍味の食味体験、小魚珍味の全国シェアグラフや珍味工場の生産の様子(写真)等をもとに、珍味工場について調べてみたいことを話し合い、学習問題「珍味工場では、よい品物をたくさん作り、それを売るために、どんな工夫をしているのか。」を作った。次に、予想を立て、それをもとに原料の種類や入手先、入手の工夫、生産工程と生産の工夫、製品の開発の努力、販売先や販売の工夫等について具体的に調べる計画を立てた。計画にしたがって副読本「松前のくらし」を活用して調べた後、珍味工場の生産の工夫等についてさらに詳しく調べたいことや疑問に思っ

たことを出し合い、校区にある珍味工場の見学・調査を行った。児童は見学の見学を明確にもち、意欲的に工場見学を行った。児童は、働く人々の様子を詳しく観察したり、インタビューしたりすることを通じて、機械化、分業化された作業の中で、よりよい製品を作るために一人一人が自分の専門技術を磨き責任をもって仕事をしていることを具体的にみつけることができた。また、自分たちが帽子をかぶり服の塵を落とし消毒して工場内に入らせてもらった体験から、衛生面に特に注意していることを理解することができた。児童は、見学を通して松前の特色を生かした珍味工場の仕事の工夫について具体的にとらえることができた。これも毎年ご協力いただいている地元企業のおかげである。感謝したい。



珍味工場見学 (機械で焼く。)



珍味工場見学 (焼いたイカをさきやすいようにやわらかくほぐす。)



珍味工場見学 (きちんとさけているか。ごみなどが入っていないか。一つ一つ確認をする。)

伝統文化遺産の伝承

「鬼北文楽」

鬼北町立泉小学校 土居 洋子

鬼北文楽は、泉村（旧広見町）の岩谷部落を中心に「泉文楽」として始まった。当時、泉村では浄瑠璃が盛んで、全戸で口ずさんでいたとも言われる。阿波から浄瑠璃語りを招いて、稽古をつけてもらったこともある。大正の頃は、一座が興行に来るほどだったが、やがて、浄瑠璃歌舞伎が盛んになり、興行は途絶えた。そして、映画の登場により浄瑠璃歌舞伎も姿を消していき、やがて戦争の時代を迎える。

浄瑠璃が復活したのは、終戦後のことである。復員の兵隊や引き揚げ者などで活気づいた部落で、浄瑠璃会が始まった。数名の指導者と二名の三味線弾きの下、多数の弟子が集まり、盛大な発表会も行われたそうである。その後、会に参加するようになった毛利氏が、阿波の人形や衣装道具一式を提供した。この人形は、江戸初期の三名座の一つとして四百年の歴史を誇っていた淡路の上村平太夫一座が使用していたものである。一座

は明治三十年頃の四国公演のとき、泉村で芝居をすることになったが大雪に遭い、その他諸事情により解散を余儀なくされる。そのとき、一座の中の数人の太夫は、泉村に住んだそうである。特に、人形の頭（かしら）三十九点は、徳島の名工と呼ばれた天狗久（てんぐひさ）らの作で、芸術性の高い貴重な作品である。

その後の昭和三十九年、「鬼北文楽」として、県有形文化財の指定を受ける。天狗久の人形のみならず、舞台のすばらしさも語り伝えられていく。しかし、指導者がいないことや、火災で人形を失うことなどにより、鬼北文楽は消滅していった。

鬼北文楽が復活したのは、作家の宇野千代が阿波の名工・天狗久の伝記を取り上げて、一種のブームになったことがきっかけである。

火災に遭った天狗久の人形の修理が、熱意ある方々の尽力で計画され、復元された。「傾城阿波の鳴門」



のお弓が修復され、人形師の田村氏より、お鶴が制作・寄贈された。この二体が鬼北文楽復活の糸口になった。特に、お弓の頭は、名品と言われている。昭和六十二年、「鬼北文楽保存会」が作られ、さらに、平成五年には後援会が発足した。平成九年、鬼北文楽の人形遣いは町の無形文化財の指定を受け、現在では後継者も交えて日々練習し、公演活動も意欲的に行っている。

その中で、平成十一年、泉小学校での初めての上演を機に、児童との交流及び文楽の指導が始まった。総合的な学習の時間の中で取り組む。鬼北文楽クラブに引き継がれることになり、現在、九名の児童が、鬼北文楽保存会の三名の指導者の指導を受け、練習に取り組んでいる。毎年、九月の敬老会十一月の学芸会、三月の施設等の訪問で、文楽を上演している。

現在、泉小学校の鬼北文楽クラブが演じているのは、「アイ、父さんの名は十郎兵衛、母さんの名は、お弓と申します。……」の台詞で有名な「傾城阿波鳴門巡礼歌の段」である。十郎兵衛と妻お弓は、幼い娘お鶴を祖父母に預け、殿様の盗まれた大切な刀を探すが、なかなか見つからない。追っ手が迫り、追い詰められたところに、



形を操る。また、浄瑠璃のメンバーはお鶴の言葉の部分を担当している。

クラブには、「地域の伝統文化を受け継いでいこう」という児童が入ってくる。鬼北文楽は、伝統文化に触れる貴重な体験であり、地域について学び、伝統を受け継いでいこうとする心情が高まる。ともに、積極的に伝統芸能に参加する態度が養われる。人形を遣う者、浄瑠璃を担当する者、それぞれ、丁寧に指導していただくので、児童は徐々に覚え、上手に演じるようになる。人形がまるで生きているように感じるときがあり、難しいけれど、達成感を感じるようである。地域の貴重な文化を、今後につなげたいという思いで取り組んでいる指導者の方々の熱意を受け継ぎ、鬼北文楽クラブの活動も、さらに充実させていきたい。

巡礼姿のお鶴が訪ねてくるという場面を、児童はお弓とお鶴の気持ちを考えてながら、三人一組で人

支部だより

四国中央支部

四国中央支部の今年度の主な活動は、第四十回教育文化講演会の参加と支部教育文化講演会の開催です。

県の教育文化講演会には、四国中央市から九十名が参加し、露の団六さんの『ダウン症のアニキをもって』という講演を聴きました。軽快な語り口の中に込められたお兄さんに対する愛情と、障がいについて正しく理解してほしいという熱い思いが伝わってきました。支部教育文化講演会は、八月十一日、三島福祉会館において開催し、市内の教職員と教職員OB合わせて約四百名の参加者がありました。講師には、越智郡上島町「しまの会社」代表取締役の兼頭一司先生をお招きし、『未来の子ども達に残し伝えたいもの』という演題でお話をお聴きました。兼頭先生は、人とのつながりを大切にしたい地域興しを積極的に展開されており、自然への感謝の気持ちをもち、画一化された教育ではなく、子どもの心をいかに健全に育てていくかを大切にしたいよりよい社会を子ども達に伝えていきたいと、力強く話されました。

今後、部員の先生方と協力しながら、より充実した活動を企画運営していきたいと思えます。

西条支部

西条支部の今年度の活動は、教育文化講演会への参加と教職員美術展の開催です。

第四十回教育文化講演会へは、西条支部から百二十名が参加しました。講師の露の団六師匠とその講演内容に惹かれて、参加割当人数を上回る希望がありました。『ダウン症のアニキをもって』と題しての講演では、重度の「障碍」をもったお兄さんとの半生を愛情あふれる関西弁で軽妙に語られ、世の中にいるいろいろな人がいることが「普通」であり大切であることを伝えてくださいました。

教職員美術展は、十月末に開催する予定です。夏季休業中に実施の校内実技研修等で作成した自信作や壮年部が主催するあおば窯教室（地域の陶芸家、青葉太一先生のご指導）で作られた作品の数々が展示されます。市内三十五校全ての学校から出品があり、その数は今年も四百五十点余り。作品制作を通して、地域の芸術家との交流を深めるとともに、教職員同士のつながりを強めるよい機会となつていきます。各校の文化部員さんのアイデアを生かしたレイアウトで展示会場はさらに華やかになり、今年度も盛大に開催できるものと期待しています。

伊予支部

伊予支部では、毎年、文化部が中心となり、支部主催の教育文化講演会を実施しています。また、各学校で行われる有意義な講演会についての情報提供を依頼して、参加を呼びかけています。

昨年度は、愛教研第三十九回教育文化講演会の中予会場の世話係を担当しました。支部内に会場を設けたので、支部会員には、例年以上の参加を得て、奥村幸治氏の熱い思いを間近で聴くよい機会となりました。また、愛教研伊予支部創立五十周年の記念講演も開催されました。大きな講演会が二つあったので、文化部中心の講演会は、実施しませんでした。

今年度は、十二月二十六日に、落語家の古今亭菊志ん氏を講師に招き、松前総合文化センターで、講演会を実施する予定です。氏は、愛媛大学教育学部を卒業され、教員免許状を取得されているそうです。教師を目指しながら、落語家に転身されたユニークな経歴に興味津々です。

受講をご希望される方は、ぜひお越しください。

上浮穴支部

上浮穴支部では郡教育美術展・音楽発表会等を計画・運営するとともに、教育文化講演会への積極的な参加を行っています。それらの活動を通して、教育専門職としての視野を広め、資質の向上を図るとともに、上浮穴郡文化活動の推進に寄与することをねらいとしています。

十月から十二月にかけて、郡教育美術展を開催し、書写、図工・美術、技術・家庭科における主任会も兼ねた審査会を行っています。退職された先生方のご協力をいただきながら、作品審査や作品制作の研修をすすめることが、小規模校の多い上浮穴の先生方にとってよい機会となっております。

また、小中学校の連携による郡音楽発表会は、産業文化会館を会場に、参加校が一堂に会して実施されます。雪もちらつく寒い季節の開催になりますが、少人数ながらも温もりのある活動になっています。

少子高齢化に伴い、過疎化の進む上浮穴郡ではありますが、教育委員会や教育会、またOBの方々の支援をいただきながら、「上浮穴でしかできない教育の推進」を合言葉に、日々の教育活動に取り組んでいきたいと思えます。

大洲支部

大洲支部の主な活動は、教育文化講演会への参加呼びかけと文化研修旅行の実施です。

今回は特色ある活動として、研修旅行を紹介します。今年は一学期に参加者を募り、夏季休業中（週休日）に実施しました。行き先は、文化的な場所での親睦を図ることができるといふ目的達成のため、マイントピア別子とアサヒビール工場、そして、愛媛県科学博物館に決定しました。

バスの中では、なごやかな雰囲気の中で楽しい会話が飛び交います。いざ、目的地に着くとみんな真剣な表情で研修（見学）をしました。お土産に似顔絵を描いてもらい、悦に入っている参加者も多かったです。そして、メインイベントの昼食会場（アサヒビール園）では、「〇〇放題」という言葉を忠実に実践し、みんなで大いに語り、大いに食文化を楽しみました。もちろん、食事後の科学博物館でもしっかりと研修しました。特にプラネタリウムは最高でした。

この行事は支部の活動費で補助していただくことができるので、個人やグループで行くよりも断然お得です。例年二十〜三十名の参加人数ですが、大洲支部の元気な一面が見える活動です。

喜多支部

喜多支部の主な活動は、教育文化講演会への参加呼びかけと、支部文化活動の企画・運営です。

今年度の教育文化講演会は、前評判もよく、支部割り当ての参加者数を上回る希望者がありました。が、残念ながら当日、講師の体調不良のため、中止になりました。

支部文化活動では、ここ数年、夏季休業中に、地元に関係のある講師を招き、体験的な活動を取り入れた研修を実施してきました。

しかし、参加者が少ない状況が続いていました。そこで、今年度は、他の支部の活動状況を調べたり、会員の要望を聞いたりして、研修内容を検討しました。その結果、坊っちゃん劇場で「誓いのコイン」の観劇をすることになりました。

参加者の増加には至りませんが、観劇後に、内子町出身の出演者（加藤富子さん）らと談話をするのができました。参加者の感想からも「生の舞台を観ることが少ないので、よい経験ができた。」「今後の遠足計画を立てる際や学芸会の指導に当たった際の参考になった。」等の感想を聞くことができ、有意義な活動になったと思います。

教職員としての見聞を広めるよい機会となりました。

宇和島支部

宇和島支部では、毎年壮年部主催で「教職員夏季研修会」を行っています。その目的は、「教育専門職としての資質・能力の向上を図るとともに、地域社会に生きる一人の人間として、人間力の向上を目指す」ことです。

今年度は、「テーブルマナー」や「介護入門」「カヌー」など、十の講座が実施されました。

「折り紙教室講座」では、地域の方を講師に招き、教室掲示に使える作品作りに取り組みました。家族で参加された先生もいて、会場は真剣な中にもアットホームな雰囲気となりました。

「夏のガーデニング講座」では、地域の生花店の方を講師に迎え、季節の花を鉢に植える活動を行いました。どの鉢も素敵な作品に仕上がりました。

「ピース制作講座」は、本研修会で一番人気がある講座です。たくさんの方の先生方が熱心に作品作りに取り組んでおられました。

この研修会は、各講座においてとても意義ある活動ができ、毎年好評です。心身のフレッシュアップができるだけでなく、様々な人々とのつながりが深められるという点で、今後も継続して行っていきます。活動だと思えます。

北宇和支部

北宇和支部の主な活動は、「教育講演会」です。講師の選定が一番重要であり、しかも、今年度から教育会北宇和支部との共催になり、気を遣いました。幸い、松山赤十字病院副院長小谷信行先生を講師に迎えることができました。

会場の泉小学校にはあふれんばかりの七十四名の参加者がありました。「成育医療からみた育児で大切なこと」をテーマに講演していただきました。聞き手を巻き込んだ軽快な語り口で全員が講演に魅了され、貴重な時間を過ごすことができました。

感想の中で多かったのは、グラデーシオン思考に関するもので、「オールオアノン」から、段階を付けながら考えていくことの大切さや生活リズムを整えることの意義などについて、具体的に話していただきました。異業種の専門的な方の話は、興味をもって聞くことができました。という声がたくさんありました。

北宇和支部は鬼北町と松野町の二町で構成され、学校数も十二校と少なく小規模です。しかし、その分一人一人の会員意識が高いと思っています。文化部では、教育講演会をメインとし、会員相互の親睦と充実した活動をこれからも目指したいと考えています。

文化部活動状況

平成二十三年度

◎ 第四十回教育文化講演会の開催

- 一 演題 ダウン症のアニキをもって
- 二 講師 露の団六 氏 (落語家)
- 三 期日・会場・参加人数 (担当支部)
 - ◇ 平成二十三年八月三日(水)グリーンピア玉川 (今治・越智) 七三〇人
 - ◇ 平成二十三年八月三日(水)愛媛文教会館 (松山) 四六三人
 - ※八月四日(木)西予市宇和文化会館 (西予) は、講師体調不良のため中止
- 四 参加者の反応 (一部を抜粋)
 - ◇ 生の落語が聞き、笑いの中にも考えさせられることが多い、有意義な講演内容であった。
 - ◇ 「母にとっては異常でも、私にとっては普通」という言葉が印象的で心に残った。
 - ◇ 「普通」とは何なのかを考えさせられた。様々な環境で生きている人々がいて、多種多様な生活があることを素直に受け止め、心のバリアフリーに努めていきたい。
 - ◇ 特別支援教育との関連を期待したためか、予想人数を大幅に超える参加者であった。障害者の「害」の字への思いや、障害者を抱える家族としての思いが伝わったという参加者からの感想が多かった。

◎ 文化だより「ひびき」の発行

ひびき・第三十号 (本号) を編集・発行し、全会員に配布する。

◎ 文化部会の開催

一 文化活動推進委員会 (支部文化部長会)

- ◇ 第一回 平成二十三年五月三十一日(火) 役員選出・事業計画案審議
- ◇ 第二回 平成二十四年一月二十六日(木) (予定) 本年度の活動の反省、次年度の計画

役員選出・事業計画案審議

二 文化活動推進委員会 (常任文化部員会)

- ◇ 平成二十三年十月三十一日(月)

「ひびき」の編集・第四十一回教育文化講演会の計画
「ひびき」と「愛媛の教育」の合本計画

支部文化部長一覽

- (支部名) (部長氏名) (所属校)
- 四国中央 川上 富子 (小富士小)
- 新居浜 中野 久 (多喜浜小)
- 西 条 越智恵里子 (吉井小)
- ☆今治・越智 山本祐美子 (日高小)
- ◎松 山 後藤 陽三 (桑原小)
- 東 温 今西 俊介 (北吉井小)
- 伊 予 田中 勝子 (北伊予小)
- 上浮穴 小野 敏信 (久万中)
- 大 洲 兵頭 茂博 (豊茂小)
- 喜 多 日高 文夫 (大瀬中)
- 八幡浜 宇都宮正広 (喜須来小)
- 西 宇和 二宮みね子 (伊方小)
- 西 予 滝澤 旬子 (田之筋小)
- 宇和島 山村 由美 (高光小)
- 北 宇和 松崎 英紀 (好藤小)
- ☆南宇和 成宮 伸亮 (城辺中)
- 教研局長 亀田 勝豊 (三津浜中)
- (◎)部長 (○)副部長 ☆常任部員

あ と が き

関係の先生方のご尽力により「ひびき」を発行することができました。各地で地域の特徴を生かした活動が行われ、子どもたちがたくましく成長している様子が伝わってきます。執筆いただいた先生方に感謝いたします。

今年度の教育文化講演会は、八月三日に中予、東予地区で行われ、約千二百名の先生方のご参加をいただきました。翌日予定されていた南予地区は、講師の先生の体調不良により急遽中止となり、すでに会場にお越しいただいていた皆様には大変ご迷惑をおかけいたしました。講演内

容は「教育情報第三三二二号」で、例年よりページを増やして紹介しています。

「ひびき」は昭和五十七年度に第一号が発行され、愛媛県文化部の活動を紹介する役目を果たしてきましたが、今回をもって「愛媛の教育」に集約・統合することになりました。これまでのご愛読に感謝いたします。文化部の活動は、教師の豊かな心を育てていく機会として今後とも発展させていく所存ですので、引き続きよろしく願います。

文化部長 後藤陽三

編集 愛媛県教育研究協議会 教育研究局 文化部
 発行人 愛媛県教育研究協議会 会長 三好 龍二
 題字 山下 和美 (松山市立内宮中学校)
 印刷所 三創印刷株式会社